

平成 28 年 10 月 23 日

南の風 204

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

先日、中学校とミニバスの指導者と、リオ五輪でのアカツキファイブ女子の戦い方について話をした時のことを書きます。参加された皆さんが『南の風リオ五輪の特集号』をご覧いただいていたと思います。うれしい限りです。

まず話題に上ったのが、予選リーグの対オーストラリア戦です。3ピリ終了まで12点勝っていました。また、4ピリで最大16点差まで離れた。77対61となりました。誰もが「勝った！」と思いました。しかし『勝負は下駄を履くまでわからない』という言葉がありますが、まさにその通りで、瞬間に逆転をされてしまい残念な結果となりました。最終スコアは、86対92でした。

この結果について中学校のA先生は、「ゾーンを攻め切れなかったからだ。」と言います。具体的には、「マンツーマンに対しては、ピック&ダイブからの攻めや、相手ディフェンスの対応を見て、キックアウトからの3Pシュートも打っていたのに、ゾーンに対しては有効な攻めがあまり見られなかった。」と言います。映像を観ると確かにオーストラリアはゾーンを敷いていました。厳密に言うと、シュートを決めた時はゾーンを敷き、他はマンツーマンディフェンスだったようです。また、ガードのディフェンダーはゾーンの際も、吉田選手にはオールコートで付き、プレッシャーを与えながら下がり、3Pライン当たりからゾーンディフェンスになっていました。日本は、このゾーンとマンツーマンのチェンジングに戸惑ったようでした。攻めが単調になり、ゲームの流れが明らかに変わりました。

ミニバス指導者のB氏は、「オフェンスの足が止まってしまった。その原因はゾーンを攻めるパターンオフェンスに固執し過ぎ、5人が考えながらプレイしてしまい、動きが止まってしまったのではないか。」と言います。

日本の司令塔、吉田亜沙美選手はゲームが終わった後、「敗因は、4ピリにゲームメイクできなかった自分の責任です。」と語っていました。

私の考えを述べます。傍目八目を承知で書かせていただきます。お二人が言うように、ゾーンが攻められなかったことが一つの敗因でした。

以下、箇条書きにまとめます。

- 1 日本がマンツーマンオフェンスでやっていた、ピック&ダイブとそこからの合わせを続ければよかったのではないかと思います。映像から見る限り、4ピリのゾーンアタックはカッティングが主体でした。カッティングをして人が動いてオフェンスすることは、決して悪いことではありません。しかし残念ながら、ボールの動きが少なかつたためうまく機能しませんでした。どちらかのサイドで、ピック&ダイブを行い、逆サイドのショートコーナーからリフトして合わせる攻め（マンツーマンに対して行ったように）を続けた方がよかった気がします。
- 2 オーストラリアの8番カンパージ選手（203cm）に、4ピリだけで18点とられたことも響きました。ペイントエリア外から走り込まれ、ポジションを取られ得点されたシーンが何回かありました。組織的に守りたかったです。続きは次号にします。